

## 談 話 室

## 「文学史を語る」について

竹 村 和 子

少し前の話になるけれども、昨年の暮、アメリカ文学会東京支部例会で、「アメリカ文学史を語る」というテーマのシンポジウムが開かれた。パネリストが渡辺利雄氏、杉浦銀策氏、岩元巖氏、そして司会者を兼ねて志村正雄氏といったメンバーだった。この討論会では、司会者が意図したものでかどうか、各人が各様の文学史に対するヴィジョンを持っていたために、フロアからの質問、意見も交えて、非常に白熱した論議が展開された。それまで私は、死ぬまでにひとつ、私のアメリカ文学史を書きたいと、臆面もなく囲りの者に言っていたが、「文学史」といっても簡単に片付けられるものでないようなので、これからは、そのようなことは心の中で思っただけでも、あまり軽々しく口には出さまいと、その会の終わった後、反省したものである。ところがたまたま、香川大学で今年度後期にアメリカ文学史の講座を担当することになってしまった。一体どうやって授業を進めていけばいいのだろうか、いや文学史を語るとは一体何なのだろうか、ということを探している昨今であるので、昨年末のシンポジウムを思い出しながら、「文学史を語る」ということについて考えてみて、今秋からの授業の心構えとしたい。（「文学史を語る」という言葉と「文学史を教え

る」という言葉は、シンポジウムにおいても混同して用いられたようだったが、ここでは「語る」に統一したい。）

シンポジウムでは、まず渡辺氏が、「文学史を語る」とは文学の流れを述べるのではなく、多くの作家、多くの作品をひとつひとつ精読、吟味していくことであると主張された。「山巔を分け入るように」と形容された渡辺氏の意見を一方の端に置くと、他方の端に位置するのが、「山の尾根を歩く」と主張された杉浦氏の考えであろう。氏は多くの作品を精読することの必要を認めながら、有限の生命しかない我々にはそれにも限度があるので、「文学史を語る」などということは所詮不可能、夢のような話である、と述べる。しかしそうであっても、どうしてもその夢をみたい。ではどうするか。まずアメリカ文学の中に大きな山を読みとる。それを彼は19世紀ロマンティシズム、20世紀初頭のモダニズム、最近のポスト・モダニズムとみる。そして、それぞれの山の中で隣出していると思われる作家（彼の場合、メルヴィル、フォークナー、ピンチョン）を研究するというのである。

岩元氏は、個々の作品の作品内世界だけでなく、一つの作品が誕生する背景とも推進力ともなる、社会的、思想的、文化的…

流れも留意すべきであると主張された。そのためには作品以外に社会事情、思想の潮流なども知らなければならなくなり、ますます一人で文学史を語ることは不可能になる。だから二番目によい案として、彼は数人で分担して文学史を語るという案を提出した。これによって、山襲を分け入りながら、読者には山脈全体も、山脈が立っている平野も見渡せるというのである。

志村氏はある一つのテーマ、例えば letter、とか ego とかについて、それが表われている作品を辿っていくことも、一つの文学史を語ることになるのではないかという意見だった。

これら4つの主張は、「文学史を語る」ということについて考えられるアプローチの、4つの類型を示しているように思われるが、そもそも文学史を語ることが不可能であるという前提のために、その前提を押してまで語ろうとする熱意によって議論は沸騰したけれども、結局、どれが最善の策とも決着がつかないまま（尤もそれが当然のことであろう）、シンポジウムは閉会した。

さて、私に残された課題は、どのアプローチをとって授業を進めていくかである。私はとりあえず一人で授業をするわけだから、数人で分担するという岩元氏の方法はとりあげることができない。山の尾根を辿るといっても、今の私にはどれが尾根だか沢だかの見分けがつかない。漠然と、メルヴィル、フォークナー、パースだろうかと考えているぐらいである。精読は、30回ほどの授業数では作品の数が極度に限られ、また、断片を集めたアンソロジーでは精読の意義を失うのではないかと思われる。今、興味を持っているテーマは、作家の意

図とは非関係に、作品の中に表われる現実認識を形式と内容の両面から見ていくことであるが、このテーマにそってアメリカ文学全体を俯瞰して眺められるほど、私の研究は進んではない。と、こういう風に、具体案としてはあれこれ迷い、また自分の力不足も新めて痛感しているの、どうやって文学史を語るかということよりも、なぜ文学史を語るかについて考えてみて、目標をはるか遠くに設置し、少しでも当座の心の平安を得ようと思った。

「本当の小説は、以前の小説に対して否を発することに始まる」とティボーデは「小説の読者」という講演で語った。とすれば、文学史とは、過去の作品に対する「否」の集積と言えるのではないか。また、歴史は過去を語るのではなく、現在を、あるいは未来を語るものであるという言葉も耳にしたことがある。歴史が現在から見た過去の一つのヴァージョンであり、それが書かれている「現在」を露呈していくものならば、文学史も現在から見た過去の作品のヴァージョンであり、現在の文学状況を浮き彫りにするものであろうし、また過去の作品の「否」のヴァージョンということで、今後の文学の行方を示唆していくものであろう。勿論、「否」といっても、作品を全く否定するものではない。アンドレ・ブレイカスタンがフォークナーの『響きと怒り』を、「最も壮麗な失敗」と名付けたように、作品とは、文学史を語ることが所詮不可能にもかかわらず語っていかうすることと同様、完璧な表現が究極的に不可能にもかかわらず試みられた「壮麗な失敗」なのである。私たちは、それがどれほど「壮麗な失敗」であったかを吟味しつつ、かつ「壮麗な失敗」であったことを知

り、次なる作品を生み出す原動力を得るのである。

文学史という言葉から連想される、どことなく微臭い本の堆積、過去の遺産という印象を払拭して、「今、何を書くか」ということに直面している者の、現在観あふれた、生産的な文学史を志向できればと思

う。いや、とにかく気構えだけでもそうしていれば、精読が少々、誤読をはらみ、山脈がぼやけてしまっても、文学史の意義は保てるのではないかと、慰めている。だが、これにより心の重荷がその分軽くなったかと言えば、どうやらますます重くなってしまったようだ。

## 地球科学転換期との遭遇

木 村 学

香川大学へ赴任して約2カ月、やっと少し落ち着いてきたこの頃である。生まれ育った北海道を離れ、見る事、聞く事、新しい事の連続であった。人間、住み慣れた場からとび出し、新しい地へ足を踏み入れることはなかなか大変なことである。しかし、それはまた楽しいことでもある。

話は変わるが、地球科学の分野では、60年代から70年代がちょうどこれと同じような時代であった。1980年代に一度死に絶えた大陸移動説が、50年代に近代的装いも新たに不死鳥の如く復活し、それが60年代に海洋底拡大説と結合、60年代末にプレート、テクトニクス理論として登場したのである。それは100年に1度あるかないかの「科学の革命」にふさわしい出来事であったことはあまりにも有名である。しかし、日本の固体地球科学界は70年代を通じて、これを認めるかどうかで激しい論争が展開された。それはとくに地質学の分野で激しかった（現在も継続している）。すでに学界内でそれなりの地位や権威を獲得していた人達は、プレート、テクトニクス理論に

対して激しく抵抗した。私の学生、大学院時代はちょうどこの真ただ中にあつた。私は学生、大学院時代を通じてプレート、テクトニクスに関する講義らしい講義はきいたことがない。むしろプレート・テクトニクス理論に対する批判を多く聞いた。このことは少なくとも旧帝大系の地質教室ではよくあつたことらしい。古い観点で研究を押しすすめ、自らの体系をつくってしまった人達は、それが根底からくつがえされる事態に直面した時、保守的にならざるを得ないのであろう。その点で日本の地球科学界、とくに地質学の分野をみた時、柔軟、機敏にこの新しい流れに対応したのは、多くはいわゆる地方大学であり、若手の研究者であった。それが、今や主要な潮流となっている。日本列島形成の理論は60年代～70年代前半に語られた、私が教育をうけた内容とは全く異なることが明らかにされつつある。学生・大学院時代にまのあたりにこのような歴史的場面に遭遇し、また、そのかわりで研究出来たことはこの上なく楽しいことであつた。

このプレート・テクトニクス理論を認めるかどうかの議論の中で認めない人達に次のような論調があった。『日本人は外国で作られた研究、理論の応用は得意であるが、独創性にとんだ“日本的で世界的”な研究はダメである。プレート・テクトニクス理論は外国で作られた理論であり、それをそのまま日本列島に機械的にあてはめ応用しているのが、この理論を支持している人達である。プレート・テクトニクスに對置する新しい理論を作ることこそ、日本の地球科学者のやるべきことだ』と。これは、最近、日立・三菱のIBM スパイ事件にもからんでマスコミをにぎわしている『日本は応用の科学は得意だが、最前線を切り拓く、独創的に新しいものを作り出すことがヘタだ』との論調に似ており、日本の研究者が長い間うけつけてきた批判でもある。「独創性」のことばに日本の科学者は弱いらしく、上記の論点は一定の説得力をもち、地質学者のプレート・テクトニクスに対する抵抗の強さの一因になった。

しかし、私にはその論点の前半と後半の間にすりかえがある様に思えた。プレート・テクトニクス理論の中で「海洋プレートの海溝での沈み込みと島弧の形成」は重要な基本的原理の1つであり、そのことを徹底して研究する上で日本列島及びその周辺は地球の中で最もよいフィールドである。この基本的原理の徹底した研究こそ、日本人の地球科学者が出来る最も「世界的」なことであり、もし仮にプレート・テクトニクス理論が否定されるとしたら、そこからなされるであろう。固体地球科学の中で「日本的で世界的な研究課題」はむしろ鮮明である。独創性は科学の最前線と切り結んで、あるいは切り結ぶことを見通した時にはじめて威力を発揮するものであり、そこからはなれて一面的に強調すると「孤立する科学にのみ栄光がある」との教条主義を産み出すことになることもこの間の地球科学界の重要な教訓である。

(1982, 6, 29)

## 新任体育教官として思うこと

保健体育科 山 神 真 一

香川大学に勤めて早や3ヶ月が過ぎ、ようやく気分的にも落ちつきを感じる今日この頃である。出身大学というのは、やはり良いもので知らず知らずのうちに自分の学生時代を反芻してしまう。しかし、これからは立場が変わり体育教官として何を求め、何を行うべきかと試行錯誤していかねばと思っている。

そこで、現地点での体育教官としての所信、特に授業に対する自分の考えを述べることにする。

今の学生にとって体育とはどのような意味をもっているのか、どのような意識で体育の授業(一般体育)を受けているのか。現状把握は授業を行う上で重要である。その意味から、今回、大学の体育授業に望む

ことと題して学生の意識を調査してみた。結果を一言で表現すると「楽しく体を動かす、ワイワイ騒いでストレスを解消できる授業」といえる。つまり、強制的にあれやれ、これやれ式の授業でなく、ゲーム中心のレクリエーションな授業を欲しているのである。この意識の根底には、自由意志で楽しみたいという開放感の一端が伺える。と同時に現実には、週1回の授業にも足りないさを感じており、単に開放感を求めているだけでなく、運動の欲求や気分転換の必要性を痛感し、訴えているとも考えられる。特に気分転換については、友人との交流の場としての意識が高く汗を流し、笑い、友情の和を広げたいと望んでいる気持ちには、体育授業を行う側としては忘れてはならない貴重なものであろう。

ここで、学生の2、3の例をあげてみよう。『やっぱり週に1回きりで大したことではできないと思うのでみんなでわいわいと楽しみながら運動して体をきたえ、仲間との交流を深めるような授業がよいと思います。』

『大学という、中学、高校のようにクラスつながりの弱い所では、スポーツをして楽しみ連帯感を味わえるような授業にしてほしい。その中で体力もつけてほしい。』

そして、まとめともいえる意見があった。『誰一人、体育授業をつまらなく感じる学生がなく、みんなでスポーツをエンジョイできるような授業にしてほしい。』

また、教官自身に対しては、『また先生にも大いに元気を出してみんなといっしょになって汗を流していただきたいと思います。』や、『先生も学生と一緒にになって恥をさらしてほしい。』などといった意見が多かった。一方、体育が嫌いな者からは、

『せめて、大学の授業では残酷な順位づけなどしないでいただきたい。』や、『体育の時間に上手な人を優先して下手な者は後へまわすというようなことだけはなってほしくない。ただ、それだけを望みます。』といった意見もあり、肝に銘じなければと痛感した。

このような学生側の意識をふまえた上で、体育授業の柱を確固としたものとし、実践していかねばならない。

そこで、私の考える大学における体育のあり方を示してみたい。

まず、一般に大学はアカデミックな基盤の上に、学問研究、職業(専門)教育、人間教育を行う最高学府といわれる。この3本柱はすべて真理探究性に基づくものであり、特に人間教育は、真実のものを求める知性の開発といった特徴を持つが、中でも一般教育を通して心身ともに健全にして視野の広い、正しい判断力、創造力、実行力をそなえた人間を育成することである。大学生は心身発育の成熟期にあり、この意味では、大学の人間教育は重要な位置を占める。また、かつて大学基準協会が発表した「大学における体育」には次のようなことが書かれている。『大学時代は心身発育の成熟期であるが、学生は事物の真理を探究しようとする心組の最も旺盛な時代であるから、大学はこれに留意して、保健体育に関する科学的知識を得られると共に、その社会的、道徳的意味を理解せしめ、自ら進んで実践するようすべきである。すなわち体育は確かに実践的なものであるが、大学の体育は真理探究、従って科学生に裏づけられていなければならないことを意味している。また、人間形成については、社会的、道徳的意味との関連からその重要性を

指摘している。

以上のことから、私自身は、身体運動についての科学的知識をふまえ、社会体育、生涯体育として有効に実践しうる意識を高めさせる授業を心がけたい。もちろん、運動の場を学生間の交流、お互いに汗を流して味わえるふれあいの場にも通ずる授業と

したい。つまり、授業の中では、常に厳しさと楽しさを味あわせたい。

体育授業に対する所信を述べてきたが、最後に一言、「学生と共に汗を流したい!!」これが、私の初心である。この気持ちをいつまでも忘れずにいたいと思う。

## 高松に赴任して

古来、洋の東西を問わず、「歳月、人を待たず」と言われるように、ここ高松に赴任して3カ月、早いものである。

人生の最も多感な青年期である歳月を、社会的にも、又、年齢構成的にも、一般社会と隔絶された環境にあった大学で過ごした私にとっては、社会復帰（少々、大袈裟であろうが）するの、又、大へんな労力を要した3カ月であった。別の視点からすれば、今までの学生としての受動的な状況にあった環境からの180度の転換でもあった。

さて、私の研究分野であるが、体育原理と呼ばれるものである。体育原理といっても、一般の人には奇異な名称として、一体それが何を意味するのか、又、一体何を対象として、どのような方法をもってするのか疑問に思われるだろう。体育に関する学は、特に、スポーツに関する科学（スポーツ科学=Sport-wissenschaft）は「スポーツは学問ではない」といった主張により、長い間“Academic Taboo”として認識され、積極的に研究されずに来たという事実

があり、又、スポーツが我々に提示する現象の複雑性と多様性が、それに一層の拍車をかけ、他の諸学に比して立ち遅れているという現状である。これらの背景からも理解されるように、体育原理が何を対象とし、又、どのような方法をもって1つの学（discipline）たり得るのかに対する明確な統一的見解は見当らない。ただ、それは、我々の了解事項として、今のところ、身体論（心身相関論、最近では現象学的視座に立った研究が主流である。）、認識論、教科教育論（授業研究並びに体育教材論をも含めた範囲での）が対象として考えられ、それを主に哲学的、あるいは人文諸科学の方法を用いて、スポーツを含めた広範な体育事象を考察していくものであると考えられている。

昔から、よく「一つのスポーツを深く経験した者には人格者が多い」という言葉を耳にする。私が過去、長い間、行なってきた柔道では、同じ意味を含む言葉として「達人」というものがある。これらの意味するものは、確かにスポーツが陶冶性を内

友 添 秀 則

包することの1つの根拠になるであろうし、又、それ故に、スポーツが学校体育の教材として教育というカテゴリーの中に存在して来た1つの根拠とも考えられる。しかし、昨今のスポーツの多様化はただ単に、スポーツによる陶冶を過去、行なわれてきたように、経験的に又、希望的推測のもとに論じることを許さない状況を現出させて来たのである。以上の事柄を踏まえた

上で、スポーツで養われた倫理的特性とでも言うべきものが、果たして、いかにすれば日常生活に転移可能となるのかということが現在の最大関心事であり、又同時に、研究のテーマでもある。

まだまだ、その端緒についたばかりである。一層の努力をと肝に銘ずるばかりである。

## 物理学講義雑感

中 西 俊 介

この4月に教壇に立って講義をする身になってから3ヶ月になります。それまでは専ら講義を受ける側であったので、講義をする要領についてはまだまだ掴みきれません。農学部一回生向けの物理学を担当しているのですが、最近、講義の内容が進むにつれて啞然としている学生が目につくようになって来ました。どうも数学的な取扱いの複雑さに面喰い、戸惑っている様子なのです。やっている範囲が物体の運動を扱う力学なので、問題にしている運動がどんな運動で、どういう力が働いた場合の運動であるかをイメージとして理解する事は、具体的な事例については比較的容易であろうと考えられます。しかし、一般的な原理を導き出すとか、その一般原理を用いて具体的な運動を扱うという場合には微積分やベクトルなどの数学的取扱いがどっさり出てくるため、それらに圧倒されてしまって、物体の運動のイメージと数式の対応がつかなくなり、啞然としてしまうようです。こ

ういう事は私も教養の頃に経験があります。物理の講義を聞いていると、内容がどんどん数学的になってきて数学の話だけで時間が終わる事もあるのです。そこで出てくる数学は生半可な事では分らない場合も多く、理解するのは後回しにしてとに角ノートだけ採る事になる訳です。後でそのノートを見てみるのだけれど、沢山並んでいる数式がいったいどういう問題を扱っている時に出てきたかが分らない、または問題にしている現象のどういう事柄を表わしているかが分らなくなっているのです。それは現象の理解のための手段に過ぎないはずの数学にあまりに目を奪われたためであったのでしょう。この様な数学と現象の間の違和感は、簡単で具体的な問題を扱っている分にはまだ少ないのですが、一般化、抽象化された問題を扱う段になるとなかなか拭い切れず、ついには「なんでこんな複雑な数学を使わないかんのか。」という愚痴をこぼすことにもなるのです。また、物理

の理論が一般原理を指向しながら次々と抽象的な概念を作り出して行く物である事は一層事態を深刻にします。私自身がどうやってこの違和感を克服したかはあまり記憶にありません。おそらく、あまりに沢山の数式のシャワーを浴びせられたために、知らぬ間に慣れてしまったのでしょう。

さて、教える側の立場に立ってみると、数学と現象の物理的イメージの間の関連を違和感なしに説明するのは、それを学ぶ事よりも一層難しく思われます。そのためには、数学的記述から確固としたイメージを得る力とかそれを適切に表現する能力が要求されるのですが、まだまだ力不足の

感があります。だからといって、物理的イメージを重視してあまり数学を用いないで説明する方法を採ったとしますと、そういう方法では「自然界に生起する現象の奥に存在する法則を、観測事実に拠りどころを求めつつ追求すること」と定義される物理学において法則追求に用いられる最も重要な方法論であるところの数学的推論について充分触れる事はできないでしょう。やはりある程度の数学は必要なのです。したがって、結局は学生諸君が、私の拙ない説明をヒントにしながら数学に慣れるとか、それをイメージと結び付ける事に努力するのを期待する事になるのかもしれない。